「馬だけに、ひひん、と嘆きたくなるな」名馬《シュテルン》が盗まれた。そして、盗馬の被害状況を確認するために、保険の損害鑑定人、新年（にいねん）は、神成（かみなり）牧場に呼ばれたのだった。

「どうしてくれるんだ！この損害を！」

神成の顔は焦げたカレーパンのように脂でてかてかに光っていた。禿げた頭まで怒り心頭で紅潮しているように見える。

厩舎の鉄扉を破った形跡はなく、朝には名馬シュテルンを入れていた馬房が空っぽになっていた。シュテルンは、名馬を掛け合わせたサラブレッドで、半年後に競馬レースのデビュー戦を控えていた。盗難であれば損害補償は五千万になる。

「昨夜は大吹雪で誰も見回りに出られなかった。まさか、馬が自分で出ていくなんてありえん！」

神成は、雷（！）のごとく大きい声で被害状況を説明した。その大きさに反比例して、新年の聴き取りに向き合う気持ちは覚めていった。乾いた風が二人の間にふぶく。

警察はすでに捜査を終えて署に戻っていった。新年は便宜的に必要な調書作成のために、神成と馬房を見て回る。すっからかんになった房に、乾いた干し草が大量に残されている。馬房の外には、馬の蹄跡が残されていた。

新年は、被害状況の認識をあわせるために神成に向かって話しかける。

「ふむ……雪の上に蹄跡。馬房から運搬用道路に向かってまっすぐと。犯人は大吹雪が止んだ早朝、神成さんが馬の様子を見に来る八時前にシュテルンを盗んでいったわけですな」

「そうだ」

「ほかの馬の様子を見せてくれますか」

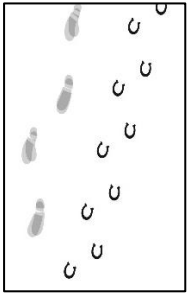
神成は、他の馬房を新年に案内した。個別の馬房は三つあり、出荷間近の馬を入れておくところのようだ。残りの房に馬はいなかった。個別の馬房の裏手には集合房があり、そこには馬が五頭いた。仔馬が二頭、成馬が三頭。みな昨夜の吹雪が馬房の隙間から入り雪化粧をして肌が真っ白になっていた。冬の牧場に耐えうるよう、申し訳程度の暖房がついている。

「犯人はシュテルンだけを狙っていたのですね」

「あの馬がこの牧場で一番価値の高い馬だったからな。で、いくらくらい出そうなんだ。損害保険は！　仕事しろ！」

（カスハラで訴えるぞじじい）悪態をつくも新年は唸った。

「では、馬の蹄跡が残る雪道を見せておらって損害補償調査は終わりにします」



新年は、雪の上に残された跡をよく見た。そして深いため息をついた。

「これは……。最初から、馬は盗まれてなんかいませんね」

「はぁ！？　何を言い出すんだ君は！　シュテルンは馬小屋にいなかっだろ！」

「もう一度馬たちを見せてください」

新年は足早に房に戻り、五頭の馬たちを丹念に見て行った。すると、雪を被っていると思われる一頭の白馬の肌のところどこらが薄茶かかっているところがある。

「この馬……」

「やめろ！　馬に触るな！」

怒る神成を無視して、新年は馬の肌を人なでした。馬は気持ちよさそうに、ひんと鳴いた。その馬の白肌の下からのぞいたのは、薄茶の肌だった。嵐の夜、神成は保険金を狙い、馬が消えたように見せる偽装をした。

トリックの肝は――蹄跡だ。

神成はシュテルンを、逆向きに歩かせた。つまり、馬が牧場から外へ出ていったように見せかける蹄跡は、実は内へ戻るものだったのだ。だが、実際の馬は房でじっと隠されていた。

「しかし、自分の靴跡は逆向きには残せなかった。馬を操るために、自分は進行方向を向くしかなかった。だから靴跡を重ねて残したんですね」

新年はにんまり笑いながら言う。

神成は肩を落とした。牧場に馬のいななきが響く。それはまるで、事の顛末に関するシュテルンの笑い声のようだった。